

赤い玉の話と浦島太郎 —話の発生と展開をめぐり—

林 晃 平

いつのころからか日本には赤い玉にまつわる不思議な話が存在している。たとえば二〇〇八年掲載の新聞のコラムにも「ちなみに「頻回のセックスで1斗だるを満たすほどの精液を出した後、尿道から赤い玉（血精液症）が出てくる」という俗説が伝わっています」とあった。⁽¹⁾ 筆者は医者で、「赤い玉」を「医聖」や「医学の父」と呼ばれているヒポクラテスが説く「血精液症」に結びつけて説明している。だが、この「俗説」の内容は引用部分以外には記されていなく、その詳細は残念ながら不明である。一方「俗説」とのみあることから、逆にこの「俗説」が既に周知のものであることが示唆される。すなわち、これに似た話は他にも既述されていた。以下、この類の話を一括して「赤い玉の話」と便宜上呼ぶことにする。

一例を挙げれば、ひろさちや著『昔話にはウラがある』の第3話「浦島太郎」に続く、第4話「乙姫様」の中に登場している。⁽²⁾ 冒頭、精液の量の話から進め、日本人のその定量を「四斗樽一個分」とし「その分量が出尽くすと、最後には白い煙と

もに赤い玉がポロリと出てくる」と記し、「予定玉終了」と刻印が打たれているとまで述べる。これだけでは乙姫とは何も関わらない話だが、この赤い玉を浦島太郎と結びつける役回りとして大学生のころ昵懇にしていたという横町の隠居が登場する。そして「いや、一人だけ、その赤い玉を見た奴がおる。浦島太郎がそれだ。玉手箱をあげると、中から白い煙が出たというが、あれは白い煙と赤い玉がポロリと出てきたのじゃ。浦島太郎は龍宮城で乙姫様とやりまくったもので、ついに予定玉終了」となったのじゃ……」と隠居は説くのである。

この赤い玉の話はいつころからどのように広まったのであろうか。赤い玉が浦島太郎とも関わるというのであれば、気がかりとなって手許にメモも溜まる。この話は「都市伝説」とも呼ばれている。⁽³⁾ その可否は一先ず措くとしても、調べてみると稀な一例と思われる。ここにその一端の報告を試み、博雅の批判を希う次第である。

吉行淳之介と若松孝二

この話が記された古い例として吉行淳之介の文章がある。「赤い玉がボンと出る……話」という題名のエッセイである。比較的入手しやすいちくま文庫『吉行淳之介エッセイ・コレクション』に依って紹介しよう。

まず「液体の保有量」という小見出しで、男女の性欲から男の生涯の射精の量に及び、医博村松博雄や落語家柳家三亀松の「四斗樽一杯の分量」などを紹介し、また「若い頃使えば使うほど、齡とつてから長保ちする」という説もあり、逆に「若い頃無駄使用すると、早く駄目になる」という説もあると記し、次のように続ける。

ところで、私の意見はといえば、まず定量説に賛成である。そして、いつ終りがくるか、といえばこれは個人差があつて、本人自身にも分らない、という考えである。

ある日突然、出る筈の液体が出なくて、その替りに、シューッと白い煙が吹き出してくる。シューツ、シューツ、としばらく煙が出ていて、やがて、ボンというコルク栓が抜けたような音とともに赤い玉がポロリと出てくる。その玉には、「オワリ」と文字が刻印されていて、それでその機械は打止め終了、ということになる。

(一〇一五頁)

このように赤い玉の話は、吉行の文章の中に確かに残されていた。玉に刻印、機械は打ち止め、オノマトペを伴った臨場感あふれる描写は、いかにもパチンコ好きの吉行らしい記述である。ここまでは浦島太郎とは関わりはない。赤い玉も単なる精液定量説における終了の告知に過ぎない。しかし、続けて「浦島太郎のチン説」という小見出しがあり、その中に「赤い玉がボン」という説を流布しているうちに、この説から浦島伝説を解釈しようという人物が出てきたのには一驚した。若松孝二監督がその人物で、長部日出雄が私に伝えてくれた。」とあり、赤い玉と浦島を結びつけた人物も特定されている。

吉行はその伝聞をそのままには記していないようなので、若松説の詳細は不明であるが「箱を開くと、白い煙がパツと出て、白髪のじじいになってしまう。残酷な話」だと解し「善いことをしたむくい、ひどい目にあうというのは、どうも困る」と述べ、「若松流でやるとまことにツジツマが合う」として、次のように記す。

鯛や平目が舞いおどり、乙姫様がにつこりして、浦島太郎はやりまくった。一生の分量を使い果す寸前までやった。もしも、娑婆でだったら、とつくに赤い玉が出ているくらいにやったのだが、竜宮城では赤い玉など出さすような、なさけない待遇はしない。

「しかし、娑婆へ帰っても、もうあなたはおやりになれませんのよ。もう使い果してしまつたのよ、それで悔いはありませんわね」

という意味を、婉曲に悟らすための道具が玉手箱なのである。蓋を開く。白い煙がシューッと出て、ボンと赤い玉が出る。あれはタマテ箱ではなくてタマデ箱（玉出箱）というのが、正しい名称なのである。（二三―一四頁）

玉手箱は浦島に限界を教えるためのシグナルを詰めた箱だったのだと、吉行は若松説を踏まえて玉手箱の意味を説くのである。おそらくこれが赤い玉の話の首尾であろう。

ところで、吉行は「赤い玉がボン」という説を流布しているうちに（前述傍線部）と記している。その流布の現場とは、どのようなものであったのか。その場の様子が山本容朗によって記されている（集英社文庫『定本・酒場の雑談』解説）。当時、山本は吉行の編集担当者で、この話を直に聞いていたのである。

「モモ膝三年シリ八年」は、銀座「エスポワール」が吉行さんの語りはじめだったような気がする。これが好評また好評で、「とと」でも一席ということになったのだろう。この店でも聞いたことがあった。

「赤い玉がボンと出る」は、新宿の「ゴードン」で耳にした。あれは初演だったのか。とにかく出来たてで湯気が出ている

ころであった。

（二六六頁）

「モモ膝三年シリ八年」とは、吉行の作った格言で、吉行のエッセイの中にはあちらこちらで見られるもの。もちろん「桃栗三年柿八年」をもじったもので「酒場の女の子の腿や膝を嫌味なく撫でられるようになるまでには、酒場がよいを三年する必要がある。お尻となると、八年かかる」という意味である。「エスポワール」も「とと」も「ゴードン」も東京のクラブやバーの名前である。「その頃、酒場の女たちとの会話の中心は艶話のだしあいだった」と山本は記している。そうした酒席で、吉行はこの話を語り広めていたのである。山本のこの記述は当時のこの類の「話」の展開過程を知るためにも興味深い。

ところで、山本が聞いた「語りはじめ」や「初演」で「湯気がでていいる」という時期、つまり赤い玉の話の成立はいつごろだったのか。手掛かりとなるエッセイは、死後刊行の新潮社版『吉行淳之介全集』（一九九七年〜九八年）には収録されていないので、書誌的事項は詳かではない。しかし、同第十五卷（一九九八年二月一日）所収の「全作品リスト」では一九六七年九月のところに「赤い玉がボンと出る」を「初出誌未詳」としながらも立項している（三五九頁）。これはおそらく『定本・酒場の雑談』に収録の当該エッセイ末尾にある「昭和四十二年九月」を踏襲したものであろう。親しく付き合った山本が記しているのだから年代に大きな錯誤はないだろう。仮

にその前年頃のこととすれば一九六六という数字が考えられる。

一九六六年末の時点では、吉行四十二歳、長部三十二歳、若松三十歳、そして山本が三十六歳となる。長部の「津軽世去れ節」「津軽じょんがら節」での第六十九回直木賞受賞（一九七三年）以前のこととなる。若松の映画監督デビューは一九六三年「甘い罠」であり、一九六五年には独立プロの「若松プロダクション」を設立しているから、肩書などにも時間的な不都合はない。若松と長部は映画関係の付き合い⁴と思われる。

吉行は気に入っていたのであろう。また酒場以外に活字による流布を企てたのかも知れない。赤い玉の話をいくつものエッセイ集に再録している。その収載本ほか関係する本の一覧を管見の限りにおいて左に記す。

- 快楽の秘薬 プレイブックス・青春出版社・一九六六年八月一日 光文社文庫・一九八四年九月一日
秘蔵の本 河出ベストセラーズ・一九六八年二月一日 光文社文庫・一九九〇年五月二〇日
怪談のすすめ 角川文庫・一九七六年六月一〇日
定本・酒場の雑談 有楽出版社・一九八六年九月二五日
集英社文庫・一九八九年一月二五日
吉行淳之介エッセイ・コレクション2 ちくま文庫・二〇〇四年三月一〇日

『快楽の秘薬』については後述する。今のところ最も早いのは『秘蔵の本』である。手許にある三月十日・二十二版の本の帯には「騒然たる大反響！驚異の売行き！」と記されている。初版は二月一日なので、確かにひと月少して二十二版となれば驚異の売れ行きであったろう。また『怪談のすすめ』（角川文庫のみ）では「赤い玉」の題名のみで小見出しはなしで収録。また先に触れた『定本・酒場の雑談』の中にも収められている。このように赤い玉の話は、いくつかのエッセイ集に収録され、死後となる二〇〇四年のエッセイ選集をも含め、特に八〇年代を中心に単行本、文庫本に少なくとも六度も刊行され、大量に「流布」していたことになる。

ところで、吉行にはこれに先行する『快楽の秘薬』というエッセイ集がある。プレイブックス版にはないが、十八年後の光文社文庫版には裏表紙（カバー）に「著者のことば」が添えてある。そこで彼は赤い玉の話に触れている。

「赤い玉がボンと出る」というギャグを、ときどきテレビなどで聞く。大昔からある笑えばなし、と思っている方が多いようだが、これは以前に私がつくったものである。

吉行はこの話が自分の創作であったことを初めて公にしたのである。またこの記述から、この時点で酒場だけでなくテレビを含めた巷に既にかなり流布していたことがわかる⁵。

先の山本の文章をよく読めば、吉行の自作自演の初演を山本はかぶりつきで鑑賞していたことになる。吉行が「流布させて」と記したのは、自作を自ら意図的に「流布させて」いたという意味であった。つまり、六〇年代後半に吉行によって創作された赤い玉の話は、ほどなく若松により浦島太郎の玉手箱と結びつけられた。一方、出版によって八〇年代前半には、口頭だけではなく記載された話としても、さらに流布に拍車がかかった。

しかし、この話は奇抜でおもしろいのだが、よく考えると話というよりは一場面だけでしかない。赤い色の玉に「オワリ」の刻印がある以外には、細部もなく、話としての筋書もなく貧弱な感じがする。必然、その肉付けとして若松孝二によって浦島太郎の話が導入されたのであろう。しかし、浦島を含む話としては、先のひろさちやのもの以外にその記載や発展したものを見ない。

デーモン小暮と「赤い玉の伝説」

九〇年代の初頭に新しい「赤い玉の話」が生まれた。「聖飏魔Ⅱ」という名前のヘヴィメタルバンドの「赤い玉の伝説」がヒットしたのである。B. D. 八年（一九九一年）一月二十一日に小教典曲（シングルCD・CBSソニー）として発布された。作詞はデーモン小暮、作曲はエース清水。編曲は松崎雄一であった。

歌の内容は題名通り赤い玉を扱ったもので、歌詞には「せめ

て お前だけは 野性のままで 赤い玉を抱いて」と「せめて お前にだけは 野性のままに さらば 伝説の赤い玉」の二箇所「赤い玉」の語が登場する。しかし、この歌詞だけではその伝説の内容がはっきりとは把握できない。ただ次のような一節がある。

ほとばしる打ち止めの気配

空蟬の幻が揺らめく

抜けば露散る氷の刃も

気付いた時は 最期の雫

「打ち止め」や「最後の雫」などからは、これまでに見えてきた吉行の「赤い玉の話」が容易に連想される。これをヒントに想像をたくましくすれば、男女の壮絶な交わりの中から赤い玉とともに悪魔が誕生するイメージを浮べることも可能であろう。「今に生まれそうだ 悪魔の種が 踊る刺青の中で」という歌詞もそれを示唆する。赤い玉を抱く「お前」が生まれ来る悪魔なのか、女神なのかは決定しがたい。また繰り返されるフレーズの中の「世にも艶やかな女神」や「二人連れ」には特定のイメージは想定できない。「さらば」という詞も「お前に」対するものか、「伝説の赤い玉」に対して告げているのかも決定できない。前者ならば「さらば」の主体は赤い玉になり、男が自らを伝説の赤い玉と見なしていることになろう。後者ならば男が自らの

限界を自覚させた伝説の赤い玉に対して、呼びかけたことになろう。しかし、これらを含む歌詞全体からは、これ以上のことはわからない。

もちろんこれが聖飢魔IIの歌う楽曲である以上は、文字面だけでなく、曲調やリフレーションや間奏、当時の彼らのコスチュームや演奏や歌唱の中での振りなども当然考慮されなくてはならないし、また歌詞にしても前後のつながりを慎重に読み解かななくてはならない。

ところで、不思議なことにこのCDの楽曲の末尾にはジャケットに掲載されている歌詞にはない短いことばが女の声で入っている。繰り返し聞いていると「往生しなっせ」と聞き取れる。この詞は同じ時期に上映された背中に火焰の光背の菩薩を描いた刺青を持つ樋口可南子主演の映画「陽炎」のポスターにも見られる⁷⁾。そして、このCDシングルジャケットにも、「原作」として販売されたカドカワノベルス版にもやはり刺青をした彼女の写真が使われている。実はこの楽曲はこの映画の主題歌としても製作されているのである。だからこれは映画の主演女優である樋口の声と解される。映画のクライマックスシーンでは「不浄ば払うちやるけん、ありがとう念仏称えて往生しなっせ」という台詞が主人公の口から飛び出すのである。

「そうなると、この歌詞は映画「陽炎」の内容とどこまで関わってくるのかということも問題となろう。それについては、デーモン小暮閣下が映画のパンフレットに寄稿していて、「風車」の

語が映画中の印象に残ったイメージから想起されたものであることを記している(パンフレット・一二頁)。ゆえに映画と歌詞は決して無関係とはいえない。事実映画の台詞にも「夢の中まで死神さんと二人連れ」などがある。そうなるとうわかりにくかった歌詞の中の「焰に浮かぶ弥勒」が映画のヒロインの「刺青」のことを指していることも理解できる⁸⁾。

この映画は、昭和三年の肥後熊本の酒楼を舞台とするヤクザと花札賭博師の物語である。ヒロインはその女賭博師「りん」が、養父の八雲楼を騙し取られた義弟を救うために故郷に戻ると、そこには実父を殺した賭博師もいた。そこで一世一代の勝負が始まる、という筋書である。

一方、映画に先行して刊行されたカドカワノベルス版、栗田教行(後の作家「天童荒太」の本名)『陽炎-KAGERO-』(一九九一年一月二五日)では、巻末に「本作品は、高田宏治氏の脚本を参考にノベライゼーションしたものです」との断り書きが付してあるごとく、映画にはない筋書や異なる部分も多い。カバー裏表紙では時代を「明治の終わりからデモクラシー運動と戦火のせめぎあう大正、さらに世界から孤立化する昭和へとなだれこむ、混沌の時代」とのみ記す。ヒロイン「不知火おりん」は、またの名を「血まみれ観音のおりん」といい、「千の荒くれを逆にくらだの下に組み敷き犯して、炎に包まれながら、なお燦然と美しく立つ、観音」(一五三頁)と本文に記されている。また、ラストシーンでは「血まみれ観音と金獅子が、二つ

の刺青いれずみをひとつにと重なるなかで、強く抱き合いここに新しい刺青たましいが生まれたかのようだった」（同・二三四頁）とあり、歌詞はこうした場面も念頭に書かれたものであろう。

気になるのは、歌詞では「弥勒」とある菩薩の刺青のイメージが、ノベルスでは「観音」と明記され、映画及びポスターやCDのジャケットなども「観音」に見えることである。「往生しなっせ」の往生先が極楽ではなく、弥勒菩薩の兜率天である可能性も否定はできない。また、ノベルスでは「金獅子」の刺青が映画では「青不動」に描かれている。これらを考えるならば、映画と楽曲とノベルスとは別個の世界観を持つ作品と見るべきなのかも知れない。互いに距離をとりながら、独立性を持った三つの作品と見なすべきなのであろう。なお、映画の中では「菩薩」という語は一回限り使われるのみ。また、映画の中にもノベルスの中にも「赤い玉」という語とそれに関わるような内容や記述はない。

つまり聖飢魔Ⅱの歌は、一方では赤い玉の伝説（打ち止め・最後の雫）を下敷きに、もう一方では映画やノベルスの内容（風車・刺青・菩薩）を絡み合わせて、さらには悪魔の申し子聖飢魔Ⅱとしての悪魔（悪魔の種）の布教をも念頭に作られたものといえる。

聖飢魔Ⅱは八五年に大教典（アルバムの意）『聖飢魔Ⅱ〜悪魔が来たりてヘヴィメタル』でデビュー。「赤い玉の伝説」のリリースはその六年後の九一年一月、吉行のエッセイの刊行から

は、二十五年後のことであつた。当時としては映画とともにヒットした曲であるというから、赤い玉の話は当時の人々の脳裏に新しいイメージを刻み付けられたといえよう。^⑨この楽曲の成立の背景には何があつたのだろう。

安部譲二の「赤い弾丸」と私屋カヲルの多精子症候群

聖飢魔Ⅱの「赤い玉の伝説」が発売される前年の一九九〇年、先行する形で赤い玉の話モチーフにした漫画が連載（初出月日・期間未詳）されていた。^⑩そして、翌年の秋、聖飢魔ⅡのCDに遅れること八箇月の九月には全三巻（三六話）の内の第一巻の単行本が刊行される。安部譲二原作・岸山直作画の『赤い弾丸』である。この第二話は「伝説の赤いタマ」というタイトルで、小暮の歌詞に重なる。

主人公菊川一郎がシュポカボスンという音とともに出した赤い玉について、友達のヨッチャんは「これが……噂に聞いていた「赤いタマ」かもしれない……」（1―二八頁）という。具体的には「日本の昔からの言い伝えだ」として、「男のモノから、赤いタマ[△]が出ると、それでもう打ち止めだそうだ……」（同・三四頁）というのである。

主人公の一郎はヨッチャん（小玉良夫）から頼まれた競馬必勝法のパソコンのプログラムを一年がかりで完成させたばかりのところだった。それがアクシデントで、名前とその個人デー

タを入力すると、その人の「赤いタマを出す」プログラムに変わってしまった。彼はこれを武器にヤクザとの闘いに挑む。

漫画として連載されていくには、単なる筋書ではなく、細部を得て、赤い玉を出した人間の心情に及ぶ必要がある。つまり赤い玉を出した人間の葛藤や苦悩が描かれなくてはならない。それに競馬の金が絡み、色恋と金と性欲が絡み合った展開となる。原作者として明記された小説家安部譲二にとっては腕の見せ所であろう。また、赤い玉も展開しやすいように変質させている。ここでは「赤い玉が出てあと一回は出来る」（同一〇一頁）ということになる。赤い玉は打ち止めの告知ではなく、打ち止め予告なのである。こうすることで主人公にも時間の猶予が与えられて、物語にふくらみができる。

ところで、この漫画には話の変形だけでなく時代性も見える。パーソナルコンピュータの登場である。パソコンが普及し始め個人所有が可能となった時代には、それに特定個人の情報を入力することによって、その人物の赤い玉を出すことも可能なのだ、という設定である。そこで「赤いタマを出してやる!!」（同一二一頁、二一三七頁）は相手への脅し文句ともなる。また、その犠牲者は、何とか元に戻してくれるように頭をさげることになる。それに競馬必勝法が絡んで物語は進む。ヤクザの組長はこれを一郎の持つ神通力と解し、大幹部は「この超能力で、緑やら黄色やらの玉をチョコビーンズみたいに出されたらどうなっちゃうかわからねえ……」（二一七頁）と一郎に対す

る畏怖を持つ。しかし、これがコンピュータの威力なのである。だから、最後には再びのアクシデントによって赤いタマは消滅し、赤い玉を出した犠牲者たちもすべては元に戻ることになる。一方ここで言及された「緑やら黄色やら」赤以外の多色の玉の発想は後述の「虹玉」へとつながる。この漫画の登場によって赤い玉の話は、その赤い玉を出した人間が、その置かれた状況の中で葛藤する、という細部を持ち、人間の感情を描く叙情性を獲得したといえよう。

その十年後に出了私屋カラルの漫画「青春ビンター」にも赤い玉の話は姿を現している。この漫画の主人公、高校一年生の浜風敏太も「赤い玉の伝説」の犠牲者である。ただし、彼の場合は、「多精子症候群」という「通常人の何倍もの精子ができてしまう特異体質」（一一二五頁）であり、それゆえ性欲も強く「やりすぎのあまり最後はちんこから赤い玉が出て死んでしまうという恐怖の体質」なのだと母親は説く。実際に父親も三十歳の若さで死んだというのだ。ここにおいて『赤い弾丸』では「噂」とか「昔からの言い伝え」といわれていたものが、「多精子症候群」という名前を付けられたことで、にわかに現実の病気（特異体質）として認識されて、重みを持つてくる。「精子を出し尽くしたら死ぬ」という多精子症で早死にするよりは「去勢して長生き」することを母親は勧める。それでなければ、いかにして性欲をコントロールしていくかが、敏太の今後の生活のカギとなる。

だが、これは第1話「オナニーで死」(二〇〇〇年「YK KINGDOM」九号)と第2話「巨乳のムダ遣い」(二〇〇〇年「YK KINGDOM」一〇号)に限って展開された話題であり、どういうわけか以降には影も及ぼさない。この体質をめぐる主人公の葛藤も描かれていないばかりか、性欲の抑制に関する苦悩も描かれていない。

そもそもこの漫画は当初からヒーローの敏太と可愛い二人の女子高生のヒロインが登場してお色気を振りまいているギャグ漫画である。しかし、その後の展開を見る限り、一貫して筋骨を追う漫画ではなく、主人公が去勢されてしまっただけは色気を前面には出すこともできない。また展開を性欲抑制の苦悩路線でいくとしても、露出の多いこのままのキャラクターでは満足な展開は図れない。ゆえにおそらく第3話以降は漫画の路線に軌道修正が施されたのであろう。これ以後はこの病名も「赤い玉」のことも、ことばとしても画面の中でも二度と登場してこない、明るいエロティックな学園漫画として描かれるだけであった。これはギャグを主題とする漫画と赤い玉の話の筋書がうまく結び付いて展開できなかったためであらう。

北崎拓と虹玉の伝説

二十一世紀に入り北崎拓の『クビドの悪戯 虹玉』(以後『虹玉』と略称)が登場する。「週刊ヤングサンデー」に全六十八話

(六七話+外伝二話)が連載され(二〇〇四年四二号~二〇〇六年一八号、外伝・二〇〇五年六月増刊号)その後、単行本として全七巻で刊行された。また、テレビドラマとしても全十二話で制作され、テレビ東京系で放映(東京では二〇〇六年一〇月一三日~一二月二日)される。しかし、ドラマは未見なので本稿では触れない。

北崎拓の虹玉の連作は、赤い玉の話独自にアレンジした恋愛漫画の傑作である。彼の特徴は先の『赤い弾丸』の予告的機能を段階化し、赤い玉を虹色の七色の玉に変えたところにある。それによって、一回限りの打ち止め通告から、しだいに色が変わり刻々と事態が進展するという、進行によって主人公には徐々にプレッシャーがかけられていき、葛藤はより深刻になるのである。

『虹玉』の主人公睦月智也は、第1話「まだなの？」で紫の玉を出す。第2話「大丈夫だけど…」の中で、そのことを知らない父親は酔った席で「嫁さんもうらう前に赤玉を出さないように、マスはほどほどにかけよ」(一―六九頁)と智也にいう。同席していた幼馴染の桐生麻美はその意味を尋ねて「男はナニを射てる回数が決まってるんだよ」「最後の一発を射ち終わった時にアソコから赤玉が出るって話さ!」(一―七〇頁)という答えを得る。ここまでは吉行の提示している「赤い玉の話」そのまま、聖飢魔IIの「打ち止め」そのままでもある。

その夜、麻美は気になって自宅のノートパソコンで「赤玉」

という語をネット検索し、たくさんの記事を見つめる。そして彼女は「男つても大変だね」「こんなくだらしない迷信がずーっと世代を越えて語り継がれるなんて」（1―七七頁）と思うのである。

ネット検索、これも細部としての時代性が現れている。既にインターネットが活躍する時代になっているのである。そこで、麻美は「後天性射精機会損失症候群」通称「虹玉」という病気の記事を見つめる。英語でO・E・A・L・S（英名「Acquired Ejaculation Opportunity Loss Syndrome」）の表記を持つ病気として認定されていたのである。モニター画面が漫画のコマにそのまま描かれる。そこには症状として「ある射精時より紫色の玉から始まって藍↓青↓緑↓黄↓橙色の玉が射出され、最後の7発目に赤玉が出る。」とあり「この赤玉が出た時、患者は二度と射精が不可能となり」と説明されているのである。麻美は智也のそれが病気であることに気づき、彼に知らせる。智也はそれを聞き愕然とし、残された六つの玉をめぐる二人の女性の間で葛藤していく。

大事なことは、この病名が存在したことである。病名が付かない病気は、かりに症状があっても病気とは診断されない。「後天性射精機会損失症候群」という病名を見て、「迷信」は「病気」へと変化したのである。結末を急げば、最後に虹玉についての最新研究成果が明かされる。それによれば虹玉は「患者の生殖機能喪失の原因そのものではなく、むしろその対抗措置として、

生命が選びとった手段なのではないかと」（7―二二三頁）というのだ。打ち止めのシグナルではなく、打ち止めに対抗して、生理的進化説を提出し玉の意味づけをはかる。すなわち子孫維持のために起きた現象、子宮内での精子生命を維持させるためのカプセルの役割を果たす殻であるというのだ。これによって赤い玉で麻美は受精し、智也との間に子どもが誕生して漫画は終わる。

ところで、北崎にはこの『虹玉』以前に虹玉漫画が既に存した。「虹玉ボンチ」（週刊ヤングサンデー・二〇〇四年二月増刊号掲載）で、作者北崎の言を借りればプロトタイプということになる。後天性射精機会損失症候群という名やO・E・A・L・Sも既にここに顔を出している。「キミは「赤玉」の話は知っているでしょう」といい、「ジジイになって最後の射精が終わった時に出るといふ打ち止めの証の…」という医師の問いかけに対し「中坊の頃クラスでよく聞く…都市伝説的ワイイ談のアレですな」と答えている。医師は「いや、医学的には真実だという仮説があるのよ。」ともいう。ここでは既に吉行の赤い玉の話が立派に漫画の中では「都市伝説」として成立している。そして、主人公名越克彦の二人の女をめぐる赤玉との葛藤がそこから始まっている。

最終場面において主人公は気づく。「たぶん虹玉は…」「自分にとって大切なことを気づかせるために…」「カミ様がしかけた時限爆弾だ」（『さくらんぼシンドローム』9―九〇頁）と。作

者は「性を正面から見据えた恋愛漫画をどうしても描きたい」（『虹玉ポンチについて』同巻）と記している。その仕掛けに赤い玉の話を用いたのである。赤い玉によって真剣に悩み、性と恋愛が一つの漫画に結実したのである。

北崎はこの『虹玉』の連載の終了後も「虹玉ポンボン」（週刊ヤングサンデー・二〇〇七年二月増刊号掲載）という単発の虹玉作品を描いている。それはちょうど『虹玉』がテレビドラマ化された時でもあった。自分の発明した虹玉というモチーフになお拘っているのである。作者はいう「小学生で、精通がぐるやいなや虹玉って〜」（『さくらんぼシンドローム』11—195頁）というシャレにならないシチュエーションこそ、「少年少女の性の目覚め」の葛藤の究極の設定といえよう。小学生を終えようとしている十二歳の武藤勇介にとって、残された虹玉とともにどう生きるか、中学入学とともに幼馴染みの女友達の麻琴とどう付き合っていくのか、はあまりに重い課題である。中学の入学式の日に、セーラー服姿の麻琴を見て改めて女として意識し勇介は思う「オレはいつか、彼女に玉を使うかもしれない」と。表面では「でも、何一つ今までと変らないフリを続けながら」（同・二二八頁）という主人公の思ひは、正に子どもから少年へと進む時に性と直面した葛藤そのものであった。そこには既に『虹玉』で提示された解決策、虹玉が精子生命維持カプセルであるという解釈は登場していない。

赤い玉の話は一場面の意味しか持たなかったが、虹玉は筋骨

をもった新たな伝説の始発であり、その中で生きていく葛藤こそがこれら一連の赤い玉の漫画の主題である。赤い玉は虹玉を生み出すことで、「都市伝説的ワイ談」を漫画という文学に昇華させたのである。

まとめ または赤い玉の伝説の行方

鳴海章に「迷うて候」という短編小説がある（書下ろし『もう一度、逢いたい』所収・実業之日本社・二〇〇〇年二月、光文社文庫・二〇〇五年六月）。そこにも赤い玉が登場している。主人公は七十八歳になる男、妻に七年前に先立たれ、息子夫婦が家に同居している。その回想に次の記述がある。

あれは五十七か、八のときだった。会社のトイレで小便をしている最中に筒先から赤い玉がぽんと出た。直径が三、四ミリくらい、かなり硬く、また重量もそれなりにあったみたいで白い陶器製のアサガオに当たった瞬間、カチンと音がした。あれよあれよという間に泡ふく小便に押しながされ、排水溝に落ちてしまったので拾うわけにもいかず、今となってもあの瞬間が幻想なのか、現実なのかはつきりしとはわからない。ひとつだけ明らかなのは、その日を境に我が煩惱器官はまるで硬くならなくなった、ということだ。（光文社文庫・二六五—二六六頁）

男は妻との生活の回想とともに「二十年以上も前、まだ赤い玉が筒先から飛びだしていいころは」（二七六頁）と自分の性欲が盛んだったことも思い出す。最後に股間に手を当てながら死んでしまう男の性欲の転機をやはり赤い玉の話が作り出しているのである。

歌は世につれ世は歌につれとは歌謡曲のことだけではない。口承文芸も含めた文学は常にそうである。西鶴『武道伝来記』の人魚を半弓で射る話の挿絵はそれが鉄砲になっている（巻二「命とらる、人魚の海」）。また、お化け好きの泉鏡花は、電話に死んでしまった女の声を聞かせ（『白鷺』一九〇七年、ビルディングの中に幽霊を登場させた〔開扉一妖帖〕一九三三年）。公衆電話の第一号機が上野・新橋両駅構内に初めて設置されたのが一九〇〇年、東京海上ビルディング竣工が一九一八年のことである。今となつては変哲もないイメージであるが、当時としては時流を見すえた驚嘆すべき趣向であった。常に時代に即応してイメージは変化していくととらえるべきであろう。

赤い玉の話についてこれまでのことを以下にまとめてみよう。それはメディアを越えて確実に広がっていった。マルチメディアが可能な現代においては、話はいとも簡単にメディアを越えて展開していく。

一九六七年九月 これ以前に吉行淳之介「赤い玉の話」を

創作、酒場で自作自演して流布させる

一九六八年二月 「赤い玉の話」が収録された『秘蔵の本』刊行される

一九九〇年九月 安部譲二原作・岸山直作画・漫画『赤い弾丸』連載開始、第一巻刊行

一九九一年一月 聖飢魔II・CD「赤い玉の伝説」発売

一九九一年一月 栗田教行・カドカワノベルズ『陽炎』刊行

一九九一年二月 五社英雄監督・映画「陽炎」公開

一九九四年一月 ひろさちや「乙姫」（昔話にはウラがある）所収を問題小説に掲載

二〇〇〇年二月 鳴海章「迷って候」（もう一度、逢いたい）所収 刊行

二〇〇〇年九月 私屋カラル・漫画『青春ビンター！』連載開始

二〇〇四年二月 北崎拓・漫画「虹玉ポンチ」を週刊ヤングサンデー増刊号に掲載

二〇〇四年一月 北崎拓・漫画「クピドの悪戯 虹玉」週刊ヤングサンデーに連載開始〜二〇〇六年五月

二〇〇六年一月 テレビドラマ『クピドの悪戯 虹玉』放映開始〜二月

二〇〇七年二月 北崎拓・漫画「虹玉ポンポン」週刊ヤングサンデー増刊号に掲載

酒場で語られた赤い玉の話、それが活字としても流布していく一九六〇年代後半から七〇年代は、高度成長時代。メディアはラジオから次第にテレビへと移行していく。八〇年代にはテレビにも赤い玉の話が登場していることを吉行自身が確認している。

そして九〇年代には、レコードから音楽メディアはCDに移行し、パソコン（パーソナル・コンピュータ）が家庭にまで入り込んでくる。文化はその新しいメディアを利用し展開していく。時代は既にマルチメディア世界が到来しているのである。また、同時にCMはメディアミックスの時代でもあった。赤い玉は、映画音楽、漫画、そしてテレビドラマへと展開していく。九五年に現れたウィンドウズ（Windows）95とそれ以降に登場されたIE（Internet Explorer）4.0は、インターネット利用を飛躍的に延ばし、一九九八年に世帯普及率が五〇%を越えた携帯電話は個のコミュニケーションを変えていった。¹² そうした背景をもって描かれたのが『虹玉』なのである。赤い玉は時代の波に乗って浮遊し、変幻自在に展開していったのである。

こうした流れをたどれば、自ずとその行方も知られよう。赤い玉の話は当分の間は続いて語られていくだろう。そして一方では、その変相曲としての虹玉などの話も、漫画を離れて静かに広がっていくだろう。昨年の春も大阪である老人から赤い玉の話について尋ねられた。話はまだ生きて動いているのである。

注

(1) 古屋聖児「泌尿器科のちよつと聞けない秘話」『ヒボクラテスの真理』、二〇〇八年一〇月一日「北海道新聞」朝刊・生活面・一七頁掲載の連載コラム。筆者古屋氏は北見医師会長。

(2) 『昔話にはウラがある』一九九六年二月一日・新潮社刊（二〇〇〇年六月一日・新潮文庫）。著者のあとがきから「問題小説」（徳間書店）に本名「増原良彦」で一九九四年七月号～一九九五年五月号（23回・23話）連載とある。

(3) 赤い玉の話を都市伝説と呼称することについては、ウィキペディアの他に『アエラ』一八一二・都市伝説探偵団・伝説95「打ち止めに赤い玉が出る」（二〇〇五年四月一日）・『週刊現代』五二巻五〇号（二〇一〇年五月二十九日）などにも見られる。

(4) 初刊本と思われるカワデベストセラーズ版『秘蔵の本 禁話のコレクション』（一九六八年二月一日・河出書房）では「長部日出雄」の直前には「映画評論家」という肩書が付いている。これは長部が小説家として名を成す以前のことだからであろう。その後直木賞を受賞して有名となり、削られたものと考えられる。他にも若干の削除箇所がある。なお、カワデベストセラーズは後にKKベストセラーズと

なる。

- (5) この『快楽の秘薬』には先の『秘蔵の本 禁話のコレクション』などにある「モモ藤三年シリ八年」や「××××」(四文字語)の話などは既に収められているが、赤い玉の話はまだない。このことは、やはりこの話の誕生を一九六六年頃に設定することの裏付けになると思われる。
- (6) この歌は、シングル集成的アルバム『愛と虐殺の日々 歴代小教典大全』B. D. 八年(一九九一年一月三日)に収録。またリマスター・ヴァージョンがB. D. 三年(一九九六年)二月一日に発布(再発売)され、『入門教典』THE BEST OF THE WORST』(D. C. 五年(二〇〇三年)六月二五日に発布の二枚組ベスト盤)でもリマスターバージョンが収録されていた。
- (7) 一九九一年二月九日公開・五社英雄監督、奥山和由製作、樋口可南子主演、松竹株式会社配給。そのVTR版のジャケットにも同じ詞は見られる。
- (8) シングルCDの発売は映画公開の二十日前、カドカワノベルズ版はその四日後である。恐らくは映画の宣伝を兼ねてメディアミックス戦略で、テレビでも映画の予告CMのバックにこの曲が流されたのではないかと想像される。なお、この「赤い玉の伝説」は「陽炎」続編でも主題歌として使われたため、リマスター版では「陽炎」四部作の続編以降を主演した高島礼子の声に変更されている。
- (9) オリコンCDシングル売り上げランキングでは、過去最高位十二位、登場回数八回で、聖飢魔IIとしても売上三位である(オリコン芸能人事典・http://www.oricon.co.jp/prof/artist/225925/ranking/cd_single/)。
- (10) 単行本刊行は第一巻一九九二年九月一日、第二巻同年一月一日、第三巻一九九二年一月一日。小学館HP「小学館コミック・スピリッツ・スピヒストリー・1985年～1990年」によれば連載開始は一九九〇年。連載期間の詳細は不明である。ただし、この記事は二〇一五年一月現在閲覧できない。同誌には、既に浦沢直樹「YAWARRA」、柴門ふみ「東京ラブストーリー」などの連載があり、同時期には細野不二彦「ギャラリーフェイク」があった。
- (11) 『近代日本総合年表・第二版』岩波書店・一九八四年による。
- (12) 橋元義明『メディアと日本人』(岩波新書・二〇一二年)では、この一九九五年から二〇〇〇年までの情報環境変化を「これまでの人類のメディア発展史上でも破格のものであろう」(五〇～五一頁)とする。(はやし・こうへい／苫小牧駒澤大学)